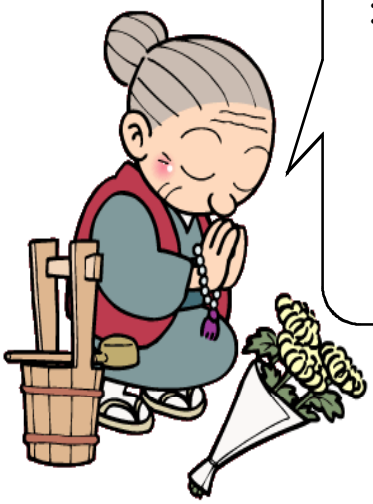
また会える　いま会える

ウチのとうちゃん、どこ？

むかし、むかし、ある所に一人のおばあさんがいました。

そのおばあさんは、まだ子どもが幼いときに、連れ合い（ご主人）に先立たれます。

そして、そのことがご縁となって、お寺にお参りするようになり、お念仏の教え（浄土真宗の教え）に出遇われました。

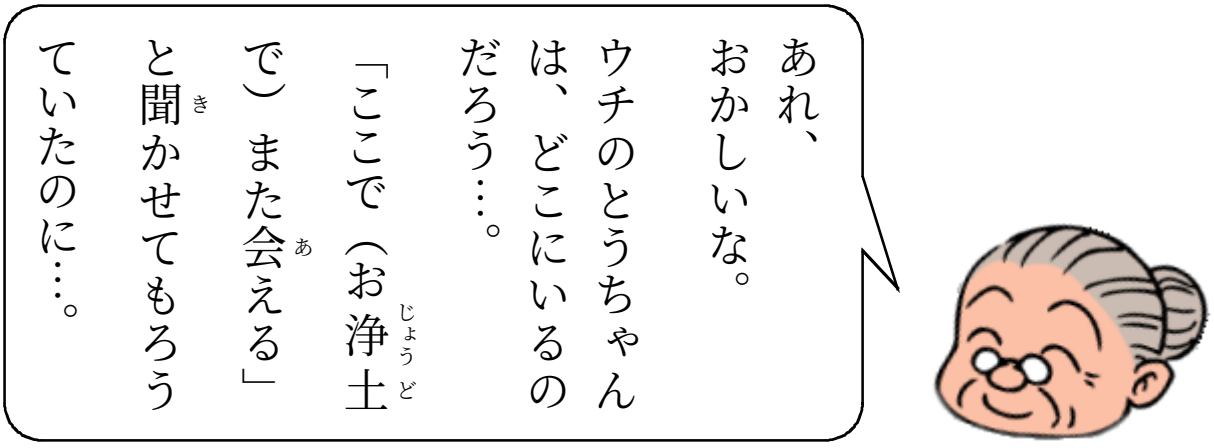


そうか。
とうちゃんとは、この世限りのご縁じゃなかった。
やがてまた、仏さまの国（お浄土）で、必ず会わせていただける。
そして今も、「ナンマンダブ、ナンマンダブ」のお念仏とともに、私のところへかえってきてくれている。
ナンマンダブ…

と、お念仏の日暮しを送られ、一生を終えられました。

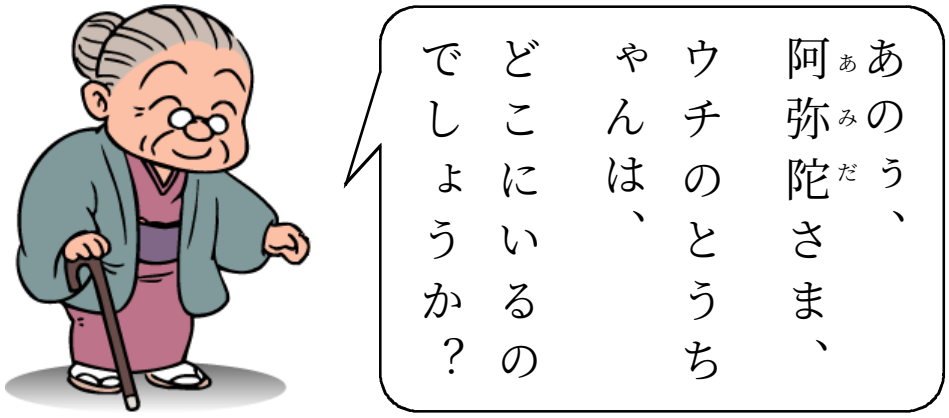
お浄土に生まれたおばあさんは、すぐに、懐かしいご主人（とうちゃん）を捜します。

しかし、ご主人の姿は、お浄土のどこにも見当たりません。



ちょうどその時です。おりしも、阿弥陀さまが近くを通りかかられました。

おばあさんは、矢も楯もたまらず、阿弥陀さまの袖を引っ張ってたずねます。



おばあさんの問いかけに、阿弥陀さまはニッコリと微笑んでおっしゃっいました。

こんなお話をご近所の先輩住職さんが、お聞かせくださいました。さて、これはいったい、どういうことでしょう？

ウチのとうちゃんが「阿弥陀さまだった」ということは、「阿弥陀さまが『ウチのとうちゃん』という姿となって、はたらいていてくださっていた」ということになりますね。

先立つ子に導かれ…

あの平安時代の女流歌人として有名な和泉式部は、愛娘に先立たれています。和泉式部は、愛娘を亡くした時の気持ちを古歌に託して、嘆かれたといいます。

子は死にて
たどり行くらん
死出の旅
道知れぬとて
帰りこよかし

まさに亡き子を思い、心配する親心いっぱいの歌です。

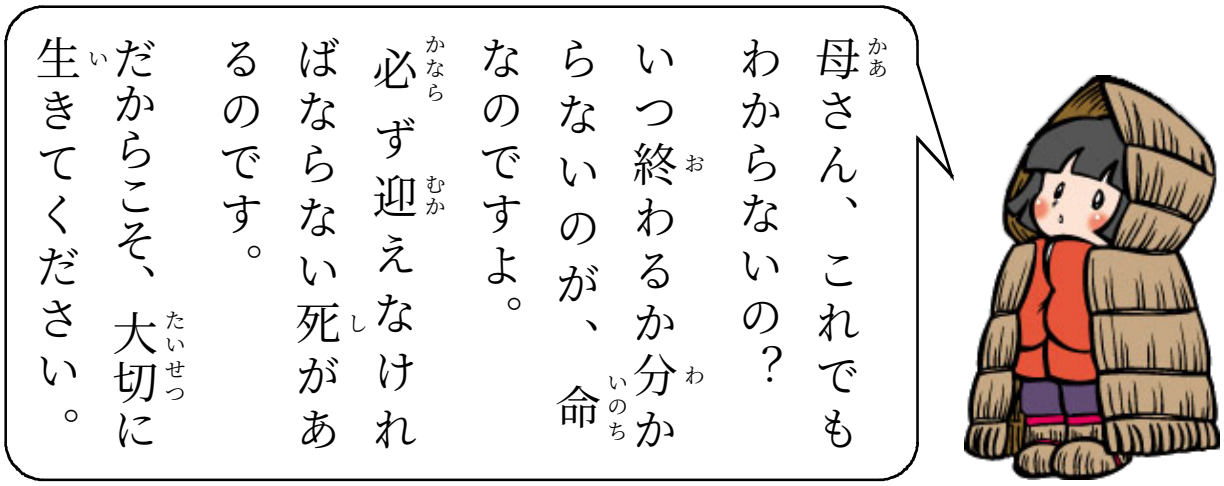
ところが、その和泉式部が、仏さまの教え（仏教）に出遇って歌が変わります。

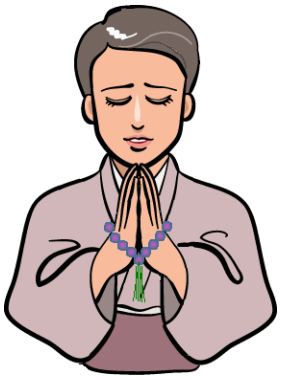
夢の世に
あだにはかなき
身を知れと
教えて帰る
子は知識なり

HIBI ARATANI Sairaku-ji Yunotsu

この「子は知識なり」の「知識」とは、仏教語で「正しく導いてくださる方」という意味です。

つまり、「先立った我が子が、自分の命をかけて、『お母さんの人生、大切に生き抜いてください』と教えて、仏さまの国（お浄土）へ帰っていった」と歌を詠んだのです。





和泉式部は、愛娘の死を通して、「よその子が死んでも、他人事にしか思わないこの私のために、今あの子は、私の子として生まれ育ち、先立って、真実を教え知らせようとしてくれた仏さまだった」といただかれたのです。

「ウチのとうちゃん」も、おばあさんのご主人として連れ添い、苦楽を共にした日々を経て先立ち、おばあさんをお念仏の教え（浄土真宗の教え）に遇わせて、お浄土へと導いてくださった『おばあさんにとっての仏さま』だったのです。

「よそのとうちゃん」なら、こうはいきません。

我れ以外、皆、我が菩薩なり

今、このことを「お浄土に往生した後ではなく、生かされているこの時に聞かされたことに意味があるのだ」と私は思います。

阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏のおよび声となって、そして時には、「さまざまな人」や「菩薩」となって、苦悩の衆生を救ってくださいます。

それは、私にとって「やさしい姿」であることもあれば、時には「厳しい姿」であったりもします。あるいは「憎まれ役」になって、この私を「真実に導き、育ててくださる」こともあるでしょう。

『親鸞』の小説で名高い作家の吉川英治氏は、「我れ以外、皆、我が師なり」と言われたそうですが、お念仏申す人生では、「我れ以外、皆、我が菩薩なり」といただくことができるでしょう。

亡き人をご縁に仏法に会うとき、また会える世界があることを知らされます。いや、「すでに出会っていた」のでした。

そして今、『ナモアミダブツ』となって、私といつも一緒に歩んでくださっているのです。

やがて、人生の幕が降り、お浄土へ往生させていただいたとき、阿弥陀さまがおっしゃってくださるのでしょう。

『アレはね、ワタシだったのですよ』と。